



○新富座當已三月狂言

「天衣紛上野初花」

○金子市之丞○槍小東左衛門(左四次) 松江出雲守○手代半七(家柄)暗井松(宮崎)駿馬(小四次)番頭傳(右衛門)

○北村大膳○番頭九兵衛(右衛門)和泉屋清兵衛(鶴助)寺田幸(衛)高木小(右衛門)宗十郎(片岡)直次郎(菊)

五郎(植)木(喜)兵衛○山谷藤五郎○山住多九藏(鶴藏)お針お元(娘)おてい(ま)り(調)腰元(派)路○三千歳(半四)

○河内山宗俊(團十郎)

○序幕

「湯島天神境内の場」

本舞臺の鳥居上、幕張、竹矢來小屋、試合といふ建札、手山茶屋あり、安に相中茶屋女四人と茶を呑み、買ひ堀田原の金子先生が劍術の試合の催を見物仕たい物だと演詞渡り小屋の内へはいる向ふより上州屋後家お繁下女一雅を連れ出来り跡より幸兵衛女房お元女房好の形にて出来り(ま)り(調)ろへお出成る上州屋のお袋までいりませぬかとお繁と演詞有て茶屋の床机へ掛り上州屋の娘を松江家へ小性に上げたる所、殿の御執心なれど、お暇が出ぬゆえ此社へ七日の日參をするといふ節とい、昔々鳥居の内へはいる試合の小屋木戸口より暗

より世話よなる上州屋なれば能工夫を教ふが一通りの事での肩かぬゆへ上野の宮様より使僧を以て松江家へ一聲御聲掛を願ふといふ工の筋をいふ夫より百兩の金があるから後見の清兵衛へ相談をなすといふなら扱わんといふ此時向ふより清兵衛町人の拵にて出来り(鶴助)其百兩私から直にお渡し申すといふ百兩包を宗俊に渡す(團十郎)そふ言事なら是を直に根岸へ廻り心機師の櫻井新之丞へ頼みいれ日あらす吉左右お聞せ申さうと受負お昔々是を聞き悦び別れを告て向ふへはいる跡見送り宗俊いとなだ事を有負だを上野の使僧へ化る趣考此相棒の片腕に仕組をさせにやアあらねへとさし向ふより相中走り來り今又平松兄いが什返しよ子分をつれて此所へと言聞宗俊の向平松が押して來る而して相手の誰だくと金子と喧嘩の様子を尋ねる鳥居より相中神主の拵にて出て此取計めを宗俊に頼むを是非なく受合身仕度をする皆々の上手へはいる大拍子となり向ふより以前の平松跡より子分の拵、新相中何れも鉢巻にて得物々を持ち押して來る宗俊是を見て宜敷くごなし花道の皆々をさつと見て(團十郎)是平松マア、待た(小四次)誰りと思は練堀小路の

の丑松でんばの拵へは跡に相中二人劍術道具を持出來り丑松ゆるする事あつて争ふを新相中世話役の拵にて是を留め、此時木戸口より先待れよと聲掛金子市之丞、劍術先生の拵にて出来り(左四次)拙者の催主の金子某、何ゆえり、る事をいふぞ(小四次)扶持方棒を捻くつてろんなおせに、乗機な丑松ぢやマア、何で已は渡りを付ねへ(左四次)多人数を集會致せば奉行川へ届免しを受し此興行金がほしく、延金たと市之丞刀を抜き突ける丑松少し恐る、こな、此時木戸口より宮の札置り出来て取押へるをまほに丑松の悪口の演詞あつて下手へ入る跡、市之丞門弟中を相手と興行の大入實入澤山恐悦くと皆々悦び是より郭へ行大口樓まで居續け致さる木戸口へ入る跡へ上州屋の女房お繁お元皆々付添出で今日日參の満願なれば定て御利益が有ぶと演詞の内訃の鳴物にて向ふより河内山宗俊着流し黒の羽織一本指が城坊主の拵にて出来り(團十郎)今途で聞か海音で喧嘩が有との事、手は誰で有ぶと無憂へ掛るをお繁は是を呼懸ける宗俊のヲ、上州屋の後家御かとは是よりお繁の松江家より娘のお暇の出ぬとい、女房をい、宗俊へ其工夫を頼む宗俊思入有て先代

旦那金子の小屋を毀しに行を留すに退て下せへや(團十郎)様子お聞た腹の直の、オオたが喧嘩を仕り此山内の人の難儀他人に恨のありやアしめへ、宜敷留る(小四次)折角のお頼だが顔に涙、此喧嘩止すにやつておくんませへ(團十郎)已が止し聞ねへなら已ら先へ殺してゆけ(小四次)何罪のおいおめへさん(團十郎)ろれなら言事を聞正具るかマア、是にて平松是非なく中裁に預引ふと云(團十郎)夫ぢやア引て呉るか、脱ぎ皆々跡戻り花道揚幕へはいる宗俊思入ある爰へ以前の神主其外世話役出来り禮とい、此時上手小屋の内より(左四次)其神此方より申述べと挨拶する宗俊とさし有て(團十郎)さすがの事を好まぬ金子氏夫なら何でも不足を言す(左四次)何の不足を言引ふ喧嘩の相手の助入麻摺貴殿が止て下るなら(團十郎)誠の武士の金子氏相手の高が遊び人五分、ならぬア、丑松、神主世話役皆々感心する(左四次)夫につけても折付き、旁松金屋で一獻上(團十郎)思召し、忝ないが余儀ない用事も、るから失禮ながら又其内然ら、近日常河内山殿金子氏、二人町噂に挨拶する皆々の宗俊へ厚く禮を云、此模様宜敷本社の大鼓まで幕

○中幕 「千代松山笑談」

但し第一番目四幕目と五幕目の間○場○備中國松山本營の場○同水谷館廣野院の場○全備門外大手先の場○役人替名○淺野家臣大石内藏之助(四十郎)○水谷家老杉山郡司(左國次)○櫻田中務太輔(家橋)○櫻田家臣安達武藏(門藏)○目附表石土佐守(佐助)○水谷の臣藤間浦之進(猿十郎)○同綱總(幸升)○全早島甚兵衛(荒次郎)○同倉垣村次郎(竹次郎)○全豐岡佐藤次(升藏)○同高橋山七(橋次)○水谷家老相方但馬(團右衛門)

(此外略也)

○本舞臺高足四間の家体本此本舞臺中は白洲階子軒口に立葵の紋付し白地の幕を絞り上手跡へ下りて、開堂青障子の附家体下手跡へさげ冠木門下手へつゞけ柳矢來此前に白木の板札へ櫻田中務太輔本營と記し青竹へ打付建有り此廻り竹の垣能所に松の立樹向釣枝處々々張張社て有る總て備中國松山在の裏家を假陣屋にまゐる休養に陣立の拵へにて(小次次)(左伊助)(龜藏)(種物六)(音羽)(門兵衛)の六人軍床机に懸り居る見得時の天鼓にて

の(鶴助)鏝下陣羽織附太刀の形にて出て(鶴)櫻田來陣所の警衛太儀で御座る(六人)石戸様に御目附の役柄角と御苦勞に存じ列る(鶴)何の厄もあれ城内へ使者に立れし安達氏の未陣陣致されぬかと云ふ此内六人向ふを見てヤア向ふに馬煙の立り武藏どの戻られしに相違ないト談の合方にて向ふより安達武藏の(門藏)陣立好の形にて軍卒二人付添出て來る(皆々)安達氏に只今歸營有しか(門藏)城中の談判に假され思わぬ遅刻(鶴)櫻田殿にも先刻より待兼歸陣の由をト此時與にて櫻田中務の(家橋)唯今夫へ參るで有らト時計の音合方にて與より家橋鏝直垂小刀跡より鏝下の兵士二人太刀を持付出て居住ひ皆々挨拶の演詞渡つて家橋が城内の返答如何と問ふ(小間次)ハッ城代杉山相方の兩士を始一藩の者列席の場にて兼て通達せし通り彌々明後十二日卯の刻に上使櫻田中務太輔副使淺野内匠頭へ當城明渡を可き趣き申じ渡せし處杉山相方の兩家老の返答ハ主人病氣にて御預と相成り跡目あさとして城地取上の義先祖の勤功思召さば寛仁の御法有沙る可を家斷絶仰付らるゝの情なき御處置假令天下の命令あり非常城の出羽守が我々を預り居れば

く皆々級能有つて演詞に備守の國松山の城主水谷出羽守の發狂され不行爲の事稻葉侯へお預跡目の筋子なる故城の御法に因り家斷絶を請うしは快つて吾君上使として御答めを發せ奉られ備國へ出張に因つて備能せし我々の萬一有事有らば戰陣に及んり兼て陣羽の御法れと城内の容子如何と存せしは案の如く城代たる國家老杉山郡相方但馬を請として三藩の臣評議あり生人の病氣に因つてお預けの身の主陣自なき迎國御領地夜収家斷絶の例則の制法との旨乍ら御先祖數度の軍功お供つて宛行われし領地召上らるゝの將軍家に於て不仁の御處置と不伏化で城代三人の假令將軍家の威命なり共我々の主人より預る處の城地異義なく上使へ渡されぬと二藩五百餘人の壯士の此土流涙の血辱を振らんより一戰おし城を脱衣討死と決心して甲冑を著なし籠城の手配せとの由夫故御家臣安達武藏をのぞ城中の空子見分旁のより一初後日城明けを可しめお使者を兼り行れし城内より返答を告前の後城を渡さぬと言ふ重傷攻撃御命も武門の我々を救ふ救世のへの使者を問たらぬのぞ此城を脱と六人の演詞有るも、城の者合方にて與より石土佐守

るゝの恩期の上一藩聚つて一戰の上五百餘人を命を城地お添てお渡し申と決心致せば此上お使者の御無用と堅く断り申せども某種々に説諭致せと頑固にて承引致さる是非に及ばせ立戻しと言を(家橋)聞てヤア公命を違背なぞ不所存者天下の御威光に拘むる事暫時の猶豫おし難ければ此山副使の淺野へ通達なし明朝未明に大手搦手より一時に攻寄乘取んと此間皆々演詞渡つて(門藏)拙者は是より副使の陣所へト立上る此時向ふより兵士二人走り出て只今淺野の陣所より大石内藏之助のぞ被泰ましと云(鶴助)イヤ何大石が泰りしとハ幸ひ是へと申せト兵士引返して遣入(家橋)思入有て大石が泰りしとい能手希才智秀と者と聞けハ幸ひ是にて軍議せんト是より床の上るりに成り向ふより大石内藏之助の(四十郎)鏝下陣羽織附太刀好の拵へにて陣立の兵士二人付添ひ出て花庭にて舞臺を見て禮義の思入有つて(團)今朝松山城内へお使者を立られし由楯籠りし家臣共如何なる返答致せしや夫承給いらんと推察せしといふ家橋始め皆々演詞有つて團十郎舞臺へ來る上るり有つて能所に居住ふ是より家橋が

今朝城内へ使者に遣はるる是なる武藏が只今歸り手切の返答と前々門藏が云つたはまりを話し拾遺れぬ故明朝軍勢を差向一戦に追ひ拂わんと思ふ故副使の陣へ此由申入れんと存せし折柄幸ひ其辭の入來着至極副使の名代兼て秀才と聞及べば定めて存慮有らん程包まず申聞されよと云ふ四十郎思入する有りて(團)主人淺野内匠頭所勞に因つて餘義なくも身不肖ながら名代申付られれど不智短才の某ゆゑ諸事舉田侯のお指揮受く處置致せとの義拙者に於ては何事に寄らず君の賢慮に随ひ升る(家)イヤ餘の義なら免も角此一戦の私ならぬ天下の制兵不覺を取れば天下の御耻辱ともなる故軍議と遂多く人命を損せずして勝利の良策思慮有んと存すれば承給りしと演詞皆々に渡り(門藏)吾君の仰有る通り軍議と遂て謀と設る此時(鶴)副使の名代たる大石氏器量勝れし隙で聞及ぶ處存慮の程を遠慮なく(家)是にて演舌(三人)致されよと上る有りて(團)仰に悖り罪あるに似たれば愚昧の存慮申上る拙者篤と勘考仕るに當松山城内に捕籠る者共の謂は一番の江大綱の勢にて天下の制兵に抗抵せんと有つて(團)其お使者にお差支あらば拙者御委任下さる間敷や(家)スリヤ城内へ籠越し彼等を説得致し呉れるが(團)御許容あらば是より直に返して及ばぬ迄も拙者が存意の才愚にて利害を説けり禽獸にてのあらざる者會由せざる事もあるま(鶴)如何にも此使者外に勤る者も有るま(家)此上の片時早く城内へ(團)捕越無事の扱ひと是より皆々演詞渡つて(鶴)大石氏に(皆々)お役目御苦勞(家)萬事よしな(團)後刻御左右と申し上るありわ成り供の兵士下手より出る四十郎思入有つて向ふへ這入る皆々行後を見送り思入有つて(家)大石が留置して翌日未明に討て出軍に勝利ある迎も人の儀も有可と(皆々)大石とのが止らぬし味方の仕(鶴)返とくも淺野殿の(小團)龍家來を扱れり(家)ハテ浦山敷に陣扇を膝へ突くを道具替り(團)事やナアト上る有り皆々向ふへ思入三重にて宜敷道具廻る(團)本舞臺二面の平舞臺左右へ折廻して襖白地(三ツ)巴の紋故じ同ト撲櫛の大櫛尚を下し総て松山城内内府院の体床三重の送りにて道具納るト下柱に櫓方但馬の團右衛門更なる家老の拵へ鏡下の形めて陣刀を側に傍裏中に坐し此上へ分れて勝間浦之進の門藏稻

ざると云ふに心切なる頑固の者共にて歎しく今兵器を以ての御成敗の些早ひくと存升ト家桶開てムハと思入(團)兵を以攻るの何時にても相成る義當城代なる家老杉山櫓方始一藩龍城なせし者共の頑固の性質にて只臣たるれ理を知て正理に暗く將軍家代命を背き龍城して公儀へ敵せんなきの思ひ至り其頑固一徹に死を決しての對戦の所謂一騎當千とも云ふ可くや多勢の兵に攻立られ早叶わぬと期を悟り四門を堅め火を放ち自刃なさんん是必定左有る時に受取べき城の焼くれて灰燼のみにて天下の御耻辱と存せれば兵器を用ひせ穩便に開城致させし其策りと憚ながら存し升と云ふ(家)流石の内匠殿が名代とて越されし大石越れなる器量某も彼等が返答悪しと思ひ一時の怒りに兵を向んと決定せしが今其許の意見感伏致しより併此上無事に開城致さず手段の(團)其義の彼等が膽に徹る利害を解説論に説諭を尽しなば人倫なるもの其條理に屈伏せざるるに故に此上篤と説諭を加へし(鶴)何様その儲け肝要なり此説客の難と以て(門藏)再度の御使者我々如き者輩が説諭なと共死を決したる涙人共中を承状致すま(家)此義に始當説諭と上るり穂室藏の猿十郎早島甚兵衛の荒次郎倉垣村次郎の竹次郎豊岡佐藤次の升藏高橋山七の橋次右の六人居並床の上る有りて各方に成りみなく思入有つて(團右)如何に何れも今度當地上使として参られし櫻田どのより家臣安達武藏と以て當城を速りに明渡せ可との事豫て同役杉山と申合せ寛仁の御沙汰有らされば容易城を渡せま(鶴)約せしに各々も同意に死を決して盟有りしハ木山共々拙者に於ても忝かじ依て先刻手切の返答致せし上り再び使者も参るま(家)必ず討手を向らる可し翌日の未明に寄來らんと引らねば各々用意然るべし(六人)兼て一同其心得にて油断あじ(團右)返とくも言ふの愚な事ながら元より主君の不行跡の御病氣の事に跡目なきとて今度の御處置の御先祖の勳功も水の泡(門)櫓方どのの仰の通り君常ならぬ御病氣にてお嫡子の御抱養にて御早世故(猿)是非なくも御養子願を出せしに如何なる上の思召にやお取上なく家國没収(荒)正に御先祖の關ヶ原の急戦より引續大坂兩度の戦闘に忠勤尽せし(竹)其功績も思召す領地改易與方始御隠居共々(升)我々共に至る迄累代住し松山を退散致すの心外と(門)止と得てして將軍家へ敵對の

本意ならぬと武士の憤慨忠義の表(猿)一藩の者洩なく神  
文血判なし(荒)斯甲冑も身を堅め(竹)今にも城受取よ寄  
来らば(升)花々敷一戦なさんと(橋)鯉口くつるげ(六人)  
待て居り升と皆々息込む是を見て(圃右)勇まし、く、數  
年恩祿賜りし君思送る、今此時明創兵を寄せるも知れず  
必ず猶豫有るまじければ合戦なすも程近ければ各勇氣を  
養ふ爲、時し酒あれば今宵の宴を開れよ(門)家老職のお  
志し忝のふれ共今仰ある通り何時寄るも知れざる敵を  
引受てい(猿)殊も淺野の名代大石の謀算ある者(荒)不意  
の夜討も計られず酒の心を亂すもの(竹)各好物なる處な  
れど大事の前(升)折角の思召を無致す(橋)不本意乍  
ら其儘お預け(六人)申すべし(圃右)ア、各が油断有ざる  
御誠心感心致した上るりにて感心の思入(ア)に成  
り向ふより士卒一人走り出て(士卒)申上り只今大手の城  
門へ副使淺野の家老大石内蔵之助と申し御城代御前所へ  
御面談致し度と参りしが如何計ひを升や(圃右)ナニ大石  
が面談を乞ふとな定めて同勢多人敷を召連れしならん(  
士卒)イエ討身の常の袷を着し供人わづか四五人にて  
参り升(圃右)さう常の(若)若用な(猿)かの人  
先ひ武士道立す兎に角面談すこそ然るべし(圃右)何様  
貴殿の詞一理有りとは是より六人演詞渡つて大石を城内へ  
招く(猿)な(圃)と云ふを左圍次理解して城内へ招入る事に  
成る演詞種々有て圃右衛門が城外へ迎ひの使者に困ると  
云ふ故左圍次が自身に行連れて來ると言ふ事なる演詞渡  
つて(圃右)スリヤ城外迄其計が(左)イヤ倍身なれど副使  
の名代敬すべさの敬するが武士たる者の禮義の道(圃右)  
然らば貴殿が山迎ふて是へ通して面談も兩人等しく居合  
せて談判の末一時演答に若差支し場合よ至らば不都合ゆ  
ゑ拙者の袷を隔て親ふべし(左)夫と遠慮の謀方一拙者  
返答に差支なば相圖致さん(圃右)心得申た(左)然らば城  
外へ罷越し大石足へ伴ひ申さん(六人)杉山殿副使を敬  
ふ自身の出向ひ御苦勞よ存じ升る(左)イヤ副使の出迎  
ひせんと上るりよ成り宜しく向ふへ這入送三重にて道具  
廻る○木舞臺正而瓦家根筋鉄の城門落り内出這入左右石  
垣の高土堤上は松の大樹釣枝後に二重櫓を見せ此巡樹木  
の茂み下土手板の廻の内へ波布を敷堀の摸様上下に城  
下を畫割し張物を苦心に飾り能處に明後十二日卯刻當城  
明渡可申者也記し有る高札を建絶て備中の國松山城外

斷のゆかぬ向にせよ此方より返答なす迄城外に扣へさせ  
よト云ふ士卒の畏つたと引返して這入る上るり有つて皆  
々心得ぬ思入(圃右)今も今際せし才智の大石禮服よて自  
身に是へ参りしに深き仔細の有る事か又謀略なるか只此  
儘面談せずには歸さうか各々の意見如何成るぞト是より  
六人が面談せずには歸すがよい左もなければ才辯で欺く  
又城内へ入れたら機密の計策を行ふもまれず此儘追ひ歸  
すが能く演詞皆々よて有て(圃右)斯決定の上からの片時  
も早く斷りせん(門)然らば拙者が城外へ罷越し大石へ斷  
り申へしト上るり有つて門藏行うと立懸る此時奥にて杉  
山郡司の(左圍次)アイヤ暫くお待ち下されと聲をかける(  
六人)アノ聲は杉山氏ト上るり又成り秋を明與より左圍  
次鐵直垂馬手差太刀を提出るを皆々見て(圃右)何故有つ  
てう淺野の名代大石が來りし故追ひ歸さうと存せしを留  
られしに彼が参しを承知有るか(左)如何も只今承知致  
した(六人)シテ何故お留りせ(左)今申せし副使の  
名代大石の智者と噂の有る者にて斯も甲冑も身を備ふ城  
中へ禮服にて緋の供人のみにて來りしに平穩なる義も疑  
の休床の三重時の大鼓にて道具納る○ト茲も大石内蔵之  
助の圃十郎好の懸袷大小太緒草履にて立身側よ家士良平  
の八平次割羽織股立大小草履よて扣へ後に新相中の足輕  
二人當浦平染の羽織袴股立向く中間二人細看板一本差袷  
箱を傍へ置居並ひ床の上るり有つて送りを見やり思入有  
つて(圃)兼て備中松山城の要害の地と聞つるが正しくも  
見渡す三面へ險岨の山を連ね樹木覆ひ茂り只一方の大手  
前其道さへも直ならずして幾曲り見通す事のならざるハ  
敵を防ぐに能便利難細張と致せしか方位に叶ふ櫓の位地  
ハテ感懷致したなアト思入有つて皆々を見やり○ヲ、  
其方共の堀端へ退き供待致せト是にて皆々思入有つて(圃  
八平)イヤ仰でハムれ共水谷殿の一家中下々小者よ至る  
迄皆討死と覺期の休(足輕)謂は猪武者なれば(中間)如何  
なる事ぞ致すも知れず(八)御身を思ふて滅多(八)五  
人)退かれ升せぬ(圃)イヤ其心志の忝なひが當城内に櫓  
籠る杉山櫓方の兩家老の義を鉄石と爲る武士と聞く必ず  
無法の事の有らじ殊も某甲冑ならぬ禮服にて來りしを獵  
り又討死聞れなし良平一人是に残り餘の者ハ彼處よて相  
待居れト是より四人の演詞有つて向ふへ行き堀端の心に



